

タイ国における現地理解とその実践

前泰日協会学校バンコク日本人学校 教諭

埼玉県秩父市立影森小学校 教諭 野 澤 雅 人

キーワード：在外教育施設、バンコク、現地理解、小学校、国際交流

1. はじめに

かねてからの夢であった在外教育施設で教鞭を執る機会を頂いた。しかし、現実には、3000人を超える世界一の大規模校で、自分が描いていた在外教育施設のイメージとはかけ離れたものだった。学校の概要や実践については、様々な形のもので出ているので、今回はタイへの感謝と現地の子どもたちとの活動を中心に報告する。

2. タイの伝統文化

タイに来て、まず感じたことは、人々の温かさである。その根底はどこにあるのかタイの伝統文化から迫っていく。タイ民族の場合、隣国として繁栄していたクメール、インド、中国、ジャワの影響を受け、仏教思想が大きく関わっている。タイの文化が多様化し大きく変化するのは20世紀に入ってからであるが、その根底となる「人間社会のあるべき姿を求める」仏教思想は変わらない。そして、仏教美術、絵画、文学、舞踊、仮面劇、人形芝居、音楽、映画、工芸、宝飾、建築、繊維、衣裳、陶器、食文化、野菜のカービング、ムエタイと様々な分野で継承されるタイの伝統文化は、継承が困難で退廃する日本と違ってさらに繁栄している雰囲気がある。タイ国の伝統文化を知るうえでまず知っておかなければならないのが、その基礎をなす代表的な大叙情詩「ラーマキエン」。「ラーマキエン」は、ヴァールミーキによるインドの叙事詩「ラーマヤナ」のタイ語訳で“ラーマの栄光”の意味をもつ。「ラーマヤナ」は東南アジア各国でも古くから知られ、同じ古代インドの叙事詩である「マハーバーラタ」とともに西暦初頭に広まったようである。この物語のモチーフやエピソードが寺院を飾る壁画、絵画、建造物のレリーフ、そして伝統舞踊、仮面劇、人形芝居、伝統工芸品の題材となっていて観光客がもっとも目にする機会が多いのも「ラーマキエン」である。2015年1月8日に、サイアムミラニットを見学した際には、タイ東部・南部・西部・北部に分かれた独特の文化を感じることができた。特に、タイ東部のイサーンと呼ばれる地方では、食文化と伝統文化の融合を感じた。

3. タイの食文化

タイの誇る食文化は本当に素晴らしいと思う。それは、タイから帰国した今なお、最も感じていることである。世界三大スープの一つに数えられるトムヤムクン、豚や鶏など具やスパイスの種類も豊富なカレー、あっさり味からこってり味まで楽しめる麺類など、タイの料理にはたくさんの種類がある。市場に並ぶ新鮮な食材を“美味しく食べる”ことこそタイ料理の真髄であると思う。“辛い”と思われがちなタイ料理だが、その味の中には“酸味”や“甘み”などが加わり、独特の美味しさを作り出している。タイは食の宝庫であると言える。

タイ料理の味を一言で言うと「複雑」。その味を作っているのは5つの味覚である。「辛味」は唐辛子や胡椒が味にピリッと刺激を加える。「酸味」はライムやタマリンドでさっぱりとした風味になる。「甘み」はココナッツミルクやパームシュガーなどのまろやかさ、「塩味」は、ナンプラーや塩で味を引き締める。そして、「旨味」はエビ味噌やナンプラーなどが、味にコクを加える。さらに、レモングラス、コブミカン、パクチーなどで「香り」を添えるのがタイ料理の特徴である。

4. タイの教育事情

義務教育は、現在では初等教育（小学校）6年と中等教育前期（中学校）3年とである。学校年度は5月に始

まり、4月に終わる。ユネスコによると2005年のタイの青年識字率は98.1%、アジアでは日本、シンガポールと並んで高水準である。義務教育は15歳までだが、タイは学歴社会なので、総じて就学意欲は高い。年間授業数は約200日であり、週5日制が一般的である。教授言語は原則として国語であるタイ語であるが、少数民族に配慮し、初等教育段階から民族固有の言語を通じた教授法を認めている。タイの教育制度は日本と同じく6. 3. 3. 4制で学校もバンコク市内については国立、公立、私立と多くの学校が点在している。地方では国立、公立の学校が中心だが、寺院を中心とした学校も多く存在する。タイでは大学まで進学する生徒は全体の2割程度だが、年々大学に進学する学生が増えてきている。タイと日本の教育制度で大きく違うのは、「とび級」がタイでは認められていて、成績優秀な子どもは16歳で大学に入学することができる。

5. タイの現地理解教育とその実践

(1) 職員旅行について

夏休みに現地校と交流をする機会を教職員が中心となって企画・運営している。目的は、タイの現地小中学校で授業をさせていただき、タイの児童とふれあい、現地理解を深めることである。人々の暮らしの様子の違いにも注目したい。今回の現地の子どもたちはいったいどのような学習をしているのか、また、学級の様子、学校の様子はどうか、授業実践を通して実感したい。そして、タイの教育の中からよいものを見つけ、教師としての幅を広げ、今後の指導に生かしたい。また日本の教育の特性や良さを再認識し、帰国後に学んだことを広めたい。ここでは、タイ南部、あまり日本人には知られていない「ナコンシー・タマラート」という場所を紹介する。ここは、プーケット、サムイという大リゾート地のちょうど真ん中にあるというだけでなく、実は世界遺産にも登録を申請している歴史ある場所である。17世紀に政争に敗れた山田長政が終焉を迎えた地で、馬屋や使用していた井戸など、そのゆかりのものもたくさん保存されている。

バンコクは仏教の土地で、生活習慣も日本人にはなじみの深いものだが、タイ南部はイスラム教の土地で、服装からしてもかなり違っている。今回、授業をさせていただく学校も、1校は仏教の学校、もう1校はイスラム教の学校である。特にイスラム教の学校は、通常はなかなか立ち入ることができないところであるナコンシータマラート県の現地校にて仏教校とイスラム校において授業を行い、学校の設備や日常の授業の様子、教師と子どもの関わりなどを肌で感じる事ができた。日本の公立校や、バンコク日本人学校に比べると、設備面で足りないところはたくさんあったが、子どもたちは皆生き生きと勉強しており、また現地の先生方の子どもたちを大切に思う温かい気持ちを感じることができた。



タイ南部イスラム教の学校での記念写真

(2) チェンマイ補習校巡回指導について

冬休みを利用して、チェンマイの補習校に示範授業と授業運営についての相談に伺った。子どもたちは、平日に、インターナショナルスクールかタイの現地校などに通い、毎週土曜日に補習授業校に通っている。今回参加した児童生徒は、保護者や本人の学習意欲が高く、補習授業校の中でも比較的成績のよい子どもたちである。日本語によるコミュニケーションはきちんとできていたが、文章を読んだり書いたりする能力については個人差がみられた。期間中に、補習校の先生方との懇親会や個別面談を通して、様々な課題を聞くことができた。また、授業中は補習校の先生方も進んで参観を行い、日本の指導でも行っていくべきであると感じた。児童生徒の学習能力については、日本語での会話は家庭と補習校だけに限られるため、日本語に関する知識やそれらを使って工夫して表現すること、文章を読み取ることについて困難な様子も見られた。巡回訪問期間中に、補習校の先生方

との懇親会や個別面談を通して様々な課題を聞くことができた。児童生徒は仲良く楽しそうに生活しているが、話の聴き方、姿勢や授業前後の挨拶など授業規律をしっかり指導したほうが良いかと意見を求められた。話を聞くと、日本に帰る生徒は少なく、多くはチェンマイに残り、現地校やインター校に通うと聞き、あえて日本の指導を意識する必要はないが、学習規律を徹底することで学力が向上するという話をさせてもらった。また、怪我に繋がりがかねない場面も何度も見られたため、具体的に話をした。一方で、学習の成果を高めるための規律は最低限必要であるが、平日は他の学校に通い、使い慣れない日本語を学習するために、休日に補習校に通うなどの努力をしているチェンマイの子どもたちには、楽しく仲間と協力して生活することを経験させることも重要であるのではないかと感じる。

また補習校の先生方は、平日に他の仕事をしている中で授業準備をして土曜日に授業を行っている。今後は、教材研究や授業準備を短時間でできるように、デジタル教材の活用や指導者間の教材の共有が必要だと強く感じた。デジタル教科書（先生用）を導入したり、プロジェクターや大型TVを活用したりできれば、先生方は効率的に授業準備ができ、効果的に授業を進めることができる。また、児童生徒たちも映像や写真を見たり音を聞いたりすることで、日本から離れた生活環境で得にくい学習経験が少しでも効果的になるのではないかと感じる。今回の巡回指導の中でも、視覚化という手立てが授業の目標を達成させるための大きな支援の一つになっていた。特に、日本と離れて学習する在外派遣施設にはその必要性も大きいと言える。チェンマイの児童生徒にバンコク日本人学校の映像を見せると、「羨ましい」と生徒たちが感想を言っていた。是非、バンコク日本人学校に見学や体験に来てほしいと感じた。小学校高学年や中学生にとっては、キャリア教育の一環としても本校で体験的に学校生活を過ごしてみる経験は意味があると考えた。今回は、補習校の先生方が課題とされている日常的な部分の授業について、展開例や手立てなどを示すことを目標として行った。授業中の補習校の先生方は大変意欲的で、日本の学校の教え方について知ろうとされる姿勢が伺え、その意欲に感心させられた。そして、今回、巡回指導に参加して、バンコク日本人学校とは違う環境で学ぶ児童生徒や、そこで指導されている先生方、学校を支える保護者の方に出会えて、大変貴重な経験ができた。児童生徒が楽しく授業に取り組む姿、もっと学びたいという姿勢が大変嬉しく、巡回指導員一同改めて教育に対する感動と刺激をもらった。今後もこうした意欲のある補習校の児童生徒の学習をサポートしていきたいと強く感じた。

以下、チェンマイで行った授業実践について簡単に紹介する。

①【国語】小5（11名）「想像力のスイッチを入れよう」

初日の2～3時間目ということもあり、児童は大変緊張していた。2時間目では主に事例と意見の関係を押さえる授業構成で臨んだ。タイ生まれタイ育ちの児童も7名在籍していたため、彼らから出た意見をより詳しく聞き返したり、教師側で補足したりするようにした。例えば、「監督の辞任の話を担当の荒井先生の行動から考えてみよう」などである。同じように、事例を児童の身近な内容に置き換えて発表させて、全員で共有するように心掛けた。考えを出し合った事例と意見、今までの自分たちの生活経験を生かして、3時間目では一人ひとり自分の意見を明確にさせた。なかなか書き始められない児童には考えを表す型を与え、例を示すことで支援した。作った後はお互いの意見についての理解を共有するために、グループの形にして一人ずつ発表し感想を言い合った。補習校の良いところは、児童一人ひとりの考えや思いに対して、教師側からの一方的な指導の流れではなく、児童からの思いに対して丁寧に返していく双方向の伝え合いができることだと実感した。



チェンマイ補習校での、示範授業

②【算数】小2（9名）「1000より大きい数をしらべよう」

小学校2年生9人に対してこの単元の1時間目の授業を行った。1000という数は、100が10個集まった数

という概念を理解させ、1000より大きい数を数えることができるようになることをねらいとした。まず、散らばった2354個の1円玉をどのように数えていくかという発問を行った。電子教科書のデータを拡大してホワイトボードに示しながら授業を進めた。100ずつ並べる考え方を児童の意見の中から引き出し、100のかたまりがいくつあるかで数を数えていった。残りの54個については、10のかたまりが5つと、1が4つという考え方を引き出すために、1円が並んだ図をホワイトボードに貼り出した。発問する中で100がいくつあるかを、1から順に数える方法とかけ算を使う方法があることが児童の意見から出された。1000より大きい数を数える方法では、100ずつのかたまりに並べ、その後の数え方について何通りかの意見がでてきた。大きくは、100を10個数えて1000をつくりそれが2つあるという方法と、100が4段と5列に並んでいたのを利用して 5×4 で20個あるとかけ算を利用した方法である。1000より大きい数のことは概ね知っていたが、今回の授業のように多様な考え方を共有し合う授業の進め方によって、より理解を深めることにつながったと感じた。また100が10個で1000のように、日本語に置き換えて考えることに難しさを感じている児童もいた。お金の模型を使って考えさせたことで理解が深まったように感じる。今回はデジタル教科書のデータを拡大し紙媒体にすることで、それに児童の考えを書き込ませ、友達の考え方とすぐに比較することができた。児童の実態や授業のねらいに応じて、デジタル教材とアナログ教材の良さを使い分けることが重要だと感じた。



チェンマイ補習校の全校児童と教職員とともに・・・

6. タイという国に感謝

「ほほえみの国タイ」では、どこへ行っても様々な人が笑顔で私を受け入れてくれた。そして、子どもたちにとっても優しい彼らは、日本人が利便性の影で忘れ去られていた人の温かさやつながりを思い出させてくれた。タイに行かせて頂いたことで、自分の人生観が180度変わったことは間違いない。この経験を自分が関わる子どもたちに伝えていきたい。

7. おわりに

このような機会をいただくことができ本当に感謝している。国際社会を作る一員として、今後も日本の教育活動の発展に貢献したい。そして、外国と比較することで日本の良さを再発見できたことも大きな収穫の一つであった。今後は、これから出会うすべての子どもたちに、国際的な感覚を醸成できるよう努めていきたい。